

書 評

森田健嗣 監訳

『台北歴史地図散歩』

ホビージャパン2019年3月 181頁 2,400円＋
税およびAndroid用アプリ「台北歴史地図」・
「台南歴史地図」

評者はかつて『地理』誌上に「旧植民地における近代化遺産」¹⁾なる小文を寄せたことがある。その際に有効だとしたのが

- ①「大日本職業別明細図」
- ②「日治時期台湾都市発展地図集」
- ③「台湾堡図」
- ④ 鳥瞰図類

などを携行することだと述べた覚えがある。

要は、古い地図を持って行く必要があり、その地図の所在について論じたのだが、ここまでならば敢て新しく書評をしなくとも、すでに論じていることなので屋上屋を重ねる必要はない。

「ところが」である。近年のデジタル・デバイスの発達・利便性の向上は隔世の感ありで、海外旅行の際に「普段自分が使っている携帯電話を持って行き・そのまま使う」ということが、普通に行えるようになってきた。10年ほど前までは、上記①～④に掲載された地図を複写し、持って行く必要があったのが、スマートフォン用アプリを導入することでその必要がなくなったのである。

書評なので、アプリを評するより先に、そのアプリに基づいて解説した『台北歴史地図散歩』について評したい。本書は、もともと、台湾でアプリと連動して発行された刊本を日本語訳したものである。台湾では、日本統治時代の建築物や都市景観に関する懐古的関心は高く、関連書籍は多数出版されている。本書は、盛んな出版をスマホ文化に対応させたものとして評価できよう。本書は以下の全4章24項目で構成される。

アプリ紹介/本書の手引き

滄海変じて桑田となる台北の歴史

1694年、大地震発生！台北盆地の陥没と湖の形成

武力闘争と市街地の盛衰
城郭都市「台北城府」の誕生
近代都市に変身
日本の皇族、台北を訪問
躍進する都市
失われたほろ苦い青春の記憶
悪疫を越えてーペスト撲滅と産婆の振興ー
来た！南無警察大菩薩
博愛特区の、今と昔
世界を眼下に収め世界の果てを耳に聞く
台北、幻の路面電車
博愛の心、広がる
魂は死なずー蔣渭水の葬列
目覚ましき経済発展
大稲埕は茶に夢中
煙立ちのぼる専売事業
歓楽の地
大盛況！史上空前のカーニバル
庶民生活
美味なる台北
紳士の社交場と子供の樂園
劇もまた人生のように
祭りばやしに街が沸く！
恋愛ゲームはカフェ文化とともに
スポーツをするなら、台北に行こう
煉獄、1945
付録
途切れた時空のクロスポイント
図目次、参考文献、本書掲載地図

台湾で元々出版された書物であるがゆえだろう、評者が初見の写真が多数含まれている。その写真出典だけで、13施設＋15書籍に及び、然もありませんと驚かされる。

古い建物という「点」を紹介するような書物は割と一般的であるが、関心が古い地表面という「面」と言うことが新しく、かつスマートフォン用アプリを連動させていることに大きな意義がある。

「地図を見る」ということは、定位ができることが前提であり、ある程度のトレーニングを要す

る。さらに言えばわれわれ歴史地理学徒は、古い地図上で現地比定をする必要がある。

スマートフォン用アプリを活用することで、スマートフォンに標準でついているGPS機能を使い、「今どこにいるか？」ということ、GPS衛星で知ることができる。このため定位をする能力がなくても、「地図上のどこにいるか」がわかる。現在の地図上で現在位置を把握できたら、古地図上と現在の地図上の対応関係を取ってあげればよい(ただし実際には現在の地図と古地図との間に「ゆがみ」が存在するためにその補正をしてあげる必要はある)。古地図類であっても位置情報がわかっていれば、スマホ(のアプリ)を通して現況と対比することが可能なのである。

スマホ・アプリ「台北歴史地図」をダウンロードして連動させてあげると1895年～1974年に発行された古地図・古写真、空中写真と現況を対比して見ることができる。仕組みとしては、古地図類に位置情報を付与し、スマホのGPS機能と連動させてやることにより、「古地図上のどこにいるか？」と言うことが把握可能なのである。1895年～1974年までの古地図類を一覧すると、

1895年：台北・大稲埕・艋舺略図

1903年：最近実測台北全図

1914年：台北市街図

1928年：大日本職業別明細図 第156号 台北市

1930年：台北市地図

1940年：台北市地図

1945年：米軍航空写真

1952年：台北市街路詳細図

1958年：台北市地図

1974年：台北市旧航空写真

の10時代の古地図類と現況をGoogleマップをベースとして対応してくれる。10枚の地図・空中写真は、透明度を設定して現在の地図に重ねることができるので、現況との比較が可能である。

例えば、日本統治時代に作られた建成円環(台北円環・図1)というものがある。日本統治時代にはロータリーの中心部に位置する円公園として使われていた。創設は1908(明治41)年であり、1895年・1903年の古地図を見ると影も形もない。一昔前ならば、地図を片手に現地比定を必要としていたものが、スマホのGPS機能のお陰で何枚もの地図上で現地比定ができることになる。実際



図1 台北市・建成円環

(左のレンガ遺構は太平洋戦争中の防空貯水池)

2019年8月28日 天野撮影

に円環に立っているスクリーンショットが10地図分ある。Googleマップは、基本的にスクリーンショットの公開を利用規定によって禁じているのでお見せすることができないのが残念ではあるが、街歩きが楽しい上に、古写真も、同時にストリート・ビューで現況も見ることができるので、実は現地に行かなくても古景観と現況の比較が可能なおもしろい。

同様のアプリは、台湾の小京都とも評される台南市においても存在する。スマホ・アプリ「台南歴史地図」には、

1875年：台湾府城街路図

1896年：台湾府迅速則図

1896年：台南城図

1915年：台南市全図

1917年：台南市地図

1935年：台南市街図

1936年：大日本職業別明細図 第448号 台南市

1951年：台南市空中写真

1959年：台南市街図

1974年：台南市空中写真

1978年：台南市街詳細図

という11時代の古地図類が収録されている。台北に比べると、やや時代に偏りがあるが台北市のものと同様の操作性で現地比定を可能としてくれる。これらは、すべて日本語で表示している(もっとも日本語で表示されるのはごくわずかではあるが)、中国語がわからなくても問題はない。

しかしながら一方で、「台湾ならではの」の事象がGPSによる定位をやや困難にしている事情を指摘しておく。台湾には、騎楼とよばれる部分が歩行者のスペースとして供されている。騎楼とは、台湾や華南地域で一般的に見られる伝統的な建築様式で、道路に面する1階部分の庇を大きく張り出し、歩行者用空間として半屋外の空間を作り、それが隣家と連続することにより移動可能な空間として利用されている(図2)。騎楼部分は個人財産なので自由に加工がされ、連続している空間とは言え、実際には隣家の騎楼部分との間に段差があることが多く歩きにくいではあるが、強い日差しや驟雨をよけられる利点がある。

この騎楼部分は、天空からのGPS衛星の電波を直接拾えず、路面や壁面を反射した電波を拾う。従って、若干ではあるが、リアルタイムでの位置表示がずれてしまうことがあり得る。実際に使ってみた感じでは体感で1m程度の誤差が曇天時には確認できた。精度の問題は、その日の天候や上空に位置するGPS衛星の個数などにも左右されるため、再現性の高い事象であるとは必ずしも言えないが、半屋内であるがゆえに発生する現象であると言える。しかしながら、危険を省みず



図2 台北における騎楼の一例
(建物の前面が歩行空間として供されている)
2018年7月16日 天野撮影

路上に出てしまえば解決可能なことでもあるので車やバイクに気をつけながらスマホ片手に街歩きを楽しみたいものである。

(天野宏司)

〔注〕

- 1) 天野宏司「旧植民地における近代化遺産」地理641, 2008, 88-98頁。